

彼方に光を求めて

高史明

彼方に光を求めて 高史明

彼方に光を求めて

一九七三年八月三十日初版第一刷発行

著者 高 史 明

発行者 井 上 達 三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

電話東京(二九)七六五二(代表)
振替東京四一・二二三
郵便番号一〇一・一九一

装幀者 中島かほる

印刷 柳沢印刷

製本 矢嶋製本

©一九七三 高 史明

(分類) 1095 (製品) 82060 (出版社) 4604

目次

失われた私の朝鮮を求めて	五
「ふるさと」との邂逅	三
朝鮮語を知らない朝鮮人	壹
悲劇の転生	叁
なぜ文学か	六
私の歩いた道	二
里程標	一
与件としての暴力	七

彼方に光を求めて

二五

「在日」の思想

二六

日本の情念をかこむ状況

二七

「暗い絵」とわたし

二九

「国家」と「捨子」

三〇

佐江衆一の「鼠どもへの訴状」

三三

八月十五日の色

三五

あとがき

三九

彼方に光を求めて

失われた私の朝鮮を求めて 私にとっての日本語

もしも今日、この日本の大地から一切の日本語が追放されるという事態が発生したら、一体何が起るだろうか。おそらくすべての日本人が激しい決死の反対に立ちあがり、未曾有の大混乱が起るだろう。何人もそれを疑うことはできない。

だが、その反対が無慈悲に鎮圧されてしまい、この禁令がさらに強化されるという事態に進んだら、どういうことになるだろう。たとえば新聞やテレビやラジオのことばがすべて日本語ではなく、英語になり、子供たちが学校で学ぶことばも英語だけになってしまったら。さらに全国の駅名表示が英語に変えられ、ありとあらゆる出版物のすべてが英語で書かれ、詩人がその詩を日本語によって書くことが禁止されるとともに、日本の歴史が焚書になり、学ぶことが許されなくなり佐藤や鈴木といった姓名の変更まで強制されて、すべての日本人がジョージ某という風に改名しなければならなくなってしまうとしたら。

おそらくおびただしい日本人が、この禁令に屈服するより死を選ぼうとするだろう。また、たとえ表だった抵抗を何一つ見せることのできない者でも、その者が日本人であったら、やはりその存在のすべてをあげて不服従のかたまりになるにちがいない。

なぜなら、日本語の歴史は古く、そこには日本人の魂が長い年月をかけてこめられているからである。そのひびきは日本の風土の奥深くへ消すことのできない豊饒として浸潤しており、日本人が日本人であるのは、まさにこの日本語にはぐくまれてきたからであって、それは日本人の血、肉となっていて、この日本人から日本語を奪い去るのは、日本人の存在そのものの否定に等しいからである。日本人にとっては、日本語の禁圧などということはどうあっても容認できないことなのだ。

だが、抵抗は破れさり、この異常事態が一年や二年のことにとどまらず、十年二十年三十年とつづくことになったら、どうなるだろう。日本的なものの一切が追放された土壌の上に新しい世代が成長してくるということになったら。おそらく日本中の家庭に笑うことのできない珍現象が発生してくるだろう。大人はもっぱら日本語のみを使用しようとして日本語を使い、子供たちはきつと物心がつくと同時に与えられている英語を主として使うようになって、一つの家庭で二つのことばがとびかうようになるだろう。大人たちにとっては、日本語こそが国語であるにもかかわらず、子供たちの国語は英語になるからだ。しかも、この異常が、次第に日常的なものになってくるとしたら、そのとき、禁圧された日本語を失うまいとして、いつまでも英語に習熟しようとしないう親がいたら、その親の子の心にはきつと、親に対する不可解な感情とともにもどかしさや軽蔑の念が生じてき、また、親の方には自分の子が自分の子ではなく、自分から日本語を奪い去った者の子として育つものを見つめていなければならない、痛憤と恐怖が生じてくるはず。おそらく日本中に新しい多くの自殺者がでるようになるだろう。日本人が日本語しか知らないからといって侮辱されるとしたら、また、自分の子が自分の抑圧者と相似形の顔をしてくるのを見なければならぬとしたら、どうして親が絶望しないことがあろうか。大人たちは絶望し、自殺を選ばなかった者は、ふたたび公然とし

た最後の抵抗に立ちあがり、敗北してゆき、死者の後を追うようになるだろう。それでも抵抗者は、あとをたたないだろう。そして生き残った者は、うかがい知れない沈黙に沈んでゆきながら、密かに日本語を子供たちに伝えていく努力をはじめよう。日本人なら、きっとそうするはずだ。

だが、厳しい現実がその志を貫ぬきとおすことを許さなかったら、一体何が起るだろう。親が子の喋ることばを正しく理解できないと同じように子が親のことばを理解しないという事態が生じてきたら。親と子が、その心のつながりを、ついには沈黙の中でしかつかめないということになってしまったら。そのとき、親は絶望のうちに憤死し、錨綱を切られた子は、失われた魂を求めて、永遠の漂泊者になってしまわないだろうか。絶望に深く浸透されすぎた者は、たとえ巷に同じ絶望者を発見することがあっても、決して連帯することはない。日本中が、絶望者の幽鬼のような姿にみだされるだろう。そのとき、この日本は一体どうなってしまうだろうか。

もちろん、以上のことはすべて仮定にもとづいていることであって、そのような事態がさし止まった現実としてあるわけではない。だが、たとえ仮定にもとづいたことではあっても、このような禁圧を想像するとき、全身に鳥肌がたってくるのを感じるのは、私だけではあるまい。それは仮定の問題としても、恐しいことである。

だが、この恐しいことが、日本と朝鮮との関係では現実のこととしてあったのであり、それは不幸な事実である。日本の過去の為政者は、朝鮮人のへ幸福をめざす」と称して朝鮮人から、その姓名もろとも、ことばまで奪い去ろうとしたのであった。

それがどのような結果を惹き起してしまうか。私はそれをこの自分自身にそって考えてみたい。

何がいったい起きるか。もちろん私はそれをこのいまの私自身を考えるためにふり返るのであって、それ以外の目的はないのである。いまのこの私は何者なのか。朝鮮人であるはずの私から、朝鮮語が何時どのように失われていったのか。

いや、この問いの出し方は、おそらく正確とはいえないだろう。なぜなら、私は生れ落ちたときから、日本語とともに成長してきたのであるから。私は自分の記憶の糸をたどり、可能な限り遠くまで歩みつつけても、そこに朝鮮語で考えている自分を発見することはできない。私は日本語で考え、日本語で独白する。私は朝鮮人である自分について、日本語をつかって話す人間である。それは私の記憶のもっとも遠いところにある一つの暗い事件をたぐりよせたときも変わらないのである。私にははじめから朝鮮語がないのだ。

いま、暗い頭の底から、古い記憶を少しずつ引出してみよう。私は三歳のとき母を亡くした。母は六歳の兄と三歳の私を残して他界したのである。だが、これは直接、私の記憶にしみついていることではない。これを私が知っているのは、後になって父や兄から母の死が私の三歳のときだったという聞かされていたからである。私自身は、その三歳のとき、何をしていたのか、直接記憶していない。暗い記憶の断片はあるが、それは墨のような霧につつまれていて、決してその輪郭を明確にあらわすことはない。私の記憶が曲りなりにも一定の像をはっきりと結びはじめ、何かを語りはじめるのは、もう少しあとのことである。たとえば私は、仕事場の石炭場にでかける父が、私たち兄弟をゆり起し、用意された朝食についての言い置きをしている姿や、父や兄が出かけたあと、一人醒めて卓袱台に向かって坐る自分の姿をはっきり記憶している。石炭場の記憶や、兄が学校にて

かけたあと一人で食事をしていた記憶が私の記憶の遠岸にあり、おそらくそれは五歳か六歳のときの、あるいは四歳のときの記憶である。その頃、私の父は石炭置場の人足だったのだ。私は、私の体をすっかり隠してなお余裕のあった大きい石炭籠を担い、弓なりになる天秤棒の調子を取り、さらにまた天秤棒と足場板との調子を巧みにとりながら、終日石炭を担っていた父のたくましい姿を憶えている。私は長屋から、それほど遠くなかった石炭場に出かけて、ごろごろしていたものと思われる。父は朝早くでて、長屋には日暮れ時に帰っていた。従って、私は長屋と石炭場の間をゆききして時を過していたのであろう。その頃、私は何をして遊んでいたものであろうか。クソバツタを追っていた自分を、私は憶えている。だが、このいま余計なことを深追いするのは慎まなくてはならないだろう。このいま私が考えなくてはならないのは、どうして自分の中に朝鮮語の種が植えつけられていなかったのかということだ。たとえ母がいなかったとしても、父は朝鮮語をつかっていたはずであり、その朝鮮語はいつか私の中でどうなってしまったのであろう。これが問題だ。父は、朝鮮語より日本語の方をより多くつかっていたのか。いや、私の父は、決して日本語をつかおうとしなかった。その昔、祖父に命じられて日本語の学習を受けたことがあったといわれていたにもかかわらず、私の記憶する限り、父は日本語をつかおうとはしなかった。それなら、どうして私は父から父の言葉を受けつがなかったのであろう。

いまにして私は、その原因をはっきり捉えることができるのである。たしかに父は、朝鮮語しかかわなかった。だが、その機会はあまりにも少なすぎたのである。つまり、めったに口をきかなかったのだ。

だが、父のこの沈黙は、おそらく父と同じ状況におかれたとき、すべての人が示す態度であった

といえないだろうか。実際、前途に何の希望もなく、その日の労働に打ちのめされた男やもめが、六歳と三歳の子供を前にしていうべきどんなことばを持つことができるだろうか。子供たちには、父の語りたい痛憤を理解する力はまるでないのだ。深く悲哀にとりつかれた男は、何かいおうとして、逆にいっそう深い沈黙に沈んでしまう宿命にあるのかもしれない。事実、私の父のとった態度がそれだった。朝おきると、朝食の用意をし、夕方、疲れきった足を引きずるようにして戻ると、また食事の用意をして、用意した食事を私たちに食べさせると、自分は一合か二合の焼酎を呑んでほとんど何も喋ることなく、泥のように眠りこんでしまうのである。多分、何もいわず、何も考えないようにする以外に父には救いがなかったのであろう。だから父は、眠れない夜があると、貧しい朝鮮人労務者たちが開帳する賭博場に出かけて、子供たちを見つめて強まる苦痛と絶望から逃れるようにしていた。だからまた、私たち親子の間で何かまとまりのあることばがかわされることはめったになかったのである。こうして、私たちが、父から受けとる朝鮮語の語彙はきわめて限られたものとなっていくのである。それは生きていくのに最低限必要なことば、たとえば水や家というようなことばに限られ、家ということばを覚えても屋根ということばは決して教わることがなく、私たちが覚えることばは、無口な男がへめし〜ということばですべてを間に合わせるように形容詞や動詞と切り離された名詞だけとなり、それすらも指示することによって間に合わせられるが故にさらに限られた範囲のことばになるのである。そして、何が起きるだろう。

ある日、父は、生きることがもっともつらく感じられる酔い醒めの瞬間に、すでに学校に通うようになって息子が朝鮮語の世界と完全に絶縁した世界にいることを発見するのだ。つまり、酔い醒めの水が欲しくなり、朝鮮語で「水(hu)」といかめしく命じると、子供の方から「水です

か」という日本語が返ってくる事態に直面するのだ。「イヤ、ヨダ」といっても、もう遅いのである。すでに子供の方からは、「だから水なんでしょ」という返事しか返ってこないのだから。こうして私の父は、自分の絶望がさらに深まるのを感じさせられて、「日本語ジャナクテ、朝鮮語ヲツカエ」と怒鳴るようになってくるのである。いや、それは何も私の父だけのことではなかった。その主体性を否認されていた時代を生きねばならなかった多くの朝鮮の父親は、息子に朝鮮語の使用を求めるとき、必ずその声に怒気をはらませていた。そしてそれはまた当然のことなのだ。

だが、私はこのきわめて当然の怒りに対して、どう応えていったらよかったろう。私はすでに学校にいらっていたが、そこでは決して朝鮮語を教わることはできないのだ。それどころか、私はすでにその名前さえ日本風に改名させられているのである。私はヨという朝鮮語を知っていたが、それは直接水を指示してヨといわれることによって覚えたものであり、ヨということばを知っていても、それをつかって「水が呑みたい」という風にはいえないのだ。だから私は、あくまでヨという朝鮮語をつかうようにせまられると、「ヨが呑みたい」とチャンボンにつかってしまうのである。もちろんこのようにしてつかわれるヨという朝鮮語が、私の中に定着するはずはなく、一度はヨといっても、その次にはもう水にもどってしまっているのである。こうして父の絶望はさらに深まり、一方子供たちの困惑と恐怖、あるいはいわれのない叱責を受けているという思いがつのらせる反撥もまたいっそう強まり、父と子の裂け目は、ついにぬきさしならないものになっていくのだ。

私たちはこの悲しい亀裂を避けることができなかった。もし父が、その口を絶え間なくひらきつづけて、自分がなぜ沈黙せざるをえないかを話しつづけたら、そしたら事態はちがった様相を示しただろうが、私にはそれを父に求める資格はない。なぜなら、この私も父と同じ状況を生きること

になったら、きつと同じように沈黙するにちがいないからだ。

父の沈黙は、生きのびようとする父の唯一の杖だった。その事情をもっとはっきりさせるには、いままで父の沈黙の主なる原因としてきたわが家の悲惨が、決してわが家だけの特殊性で説明しつくせるものではなく、この特殊性が朝鮮民族全体の運命と直接に対応していたということを明らかにする必要があるだろう。父は沈黙せざるを得なかったのだ。私の脳裡にはそれについても消しがたい記憶がある。

それは珍しく父が機嫌の良い顔を見せた夜だった。めったに笑顔を見せたことのない父が声をあげて笑い、自から私たちとの話し合いを求めてきたということだけでも、すでにその夜は十分に記憶されている夜だったが、それはこれから述べるようなことがあっていっそう忘れることのできない夜になったのである。たしかにその夜は父の方から話しかけてきたのである。そして私たち兄弟はそれが嬉しく、かなり遅く酒気をおびて帰った父と一緒にめずらしく浮かれた気分になったのであった。そこで何が話し合われたか。いまだではもう、そのすべてを思い起こすことはできないが、とにかく楽しい夜だった。その頃、私はすでに父が何かまとまった話をはじめると、ことばが障礙になって、その話についてゆけなかったものだったが、私は何度も話の腰を折り、説明を求めて、私たちの談笑はかなり長くつづいた。そして私は、自分の喋るきつかけを捉えると、万国旗のことを持ちだしたのであった。多分、その日は何かの祭日であって、学校で見てきた万国旗の飾りが頭に残っていたのであろう。私はその夜の雰囲気はいっそう楽しいものにしようとして、美しい各国の旗の模様を説明し、最後に確信にみちた声でいったものである。「いろいろあったけど、やっぱり

一番いいのは、日の丸だったな。日の丸が一番きれいだよ」

すると、父は同じように陽気な棘のある口調で、もちろん朝鮮語であったが、およそ次のようにいいだしたのであった。「ソウカナ。世界ニハ、モットキレイナ旗ガアルンダゼ……」と。世界中の旗を見てきたつもりだった私が、私が見てきた万国旗の中にはなくて、しかもそれがもっとも美しい旗だと聞かされて、興味を抱かないはずがなかった。私はすぐその旗の説明を父にせがんだ。父がそういうからには、その旗はきつと私の目を驚かせるほどのものにちがいないのだ。その旗はどんな模様で、どんな色をしているのであろう。父は万国旗の飾りにはないはずだといったが、ひょっとすると、あったかもしれないではないか。私たちは手ぶりと想像力の助けをかりて話し合うのである。……父はもちろん、私の求めに応じて、心地よくその旗の模様を説明しはじめた。口で話すだけでなく、指でその模様を宙に描いてみせ、さらにその色をうっとりした口調で話すのだ。その話し振りは、私を有頂天にさせた。私は夢中で父の口元を見つめ、宙に動く父の太い指先を追った。だが、この私はいくらくわしい説明を聞いても、それをくつきりと頭に思い描くことができないのであった。さきに述べたように、私の朝鮮語はごく身近な、ごく限られたものであって、少しこみ入った話になると、まったく通じなかったのだ。私はしばらく自分のいらだちを抑えていたが、そのうち抑え切れなくなってしまう。おそらく、旗の説明を聞くより、一刻も早く父と同じうっとりした気分を自分のものにしたくなつたのであろう。私は、それがどこの国の旗なのかを訊ねた。「いったい、それはどこの国旗なの?」

それを聞くと、父はいっそう上機嫌になった。そして表情を崩して答えた。
「キマッテイルダロ。朝鮮ノ国旗ダ」

だが、父のその一言は、どんなに強く私を驚かせただろう。朝鮮の国旗、といういい方が、私の意識を転倒させたのだ。〈朝鮮の国旗？〉私は自分が朝鮮人であることは知っていたが、朝鮮にも日本と同じように国旗と呼ばれるものがあるとは思ってもみなかったのだ。

「朝鮮の国旗！ 朝鮮にも国旗があるの！」

だが、今度は私のその叫びが、父の意識を転倒させた。いや、それは父を文字通りの恐怖へ墜落させたといえるだろう。父は急にいつもの陰気な父の表情にもどり、「うん」と小さくうなずいたが、その声はすでに低く陰鬱だった。そして、それからはいくら私がせがんでも二度と国旗の話にもどらうとせず、最後に厳しい、子供の私にも何か恐ろしいものを感じさせる声でいったのであった。「イイカ、コノ国旗ノコトハ、ゼツタイ、ダレニモ、死ンデモ、イウンジャナイゾ」

いまの私には、このことばの背後にあった意味はすではっきりしている。私の父の沈黙は二重の抑圧に強いられたものだったのだ。私はそれっきり、父から国旗の話をしてもらえなかった。そして父が最後に見せた恐怖の表情は謎となり、それは具体的なイメージを結ばなかった国旗の謎とともに父の沈黙につつまこまれて、私の記憶の底に沈められるのである。が、それはともかく、この結果私たち親子の間の沈黙がいつそう深くなっていったのはいうまでもあるまい。この沈黙の果てに何がくるか……普通の家庭では、子供は成長していくにつれて親への理解を深めていくものだが、成長していく子供が成長していけばいくほど親にとっては敵対的なことばで武装しはじめ、親は子に語りかけることができなくなり、子は親に語りかけていくことばをもたないという状態が深まっていくとき何が起きるか。私たち親子は、いわば沈黙の中でひびきにも似た悲しみの感情によつてのみ結ばれていくのである。